

2005年度(財)国際宗教研究所賞について

(財)国際宗教研究所は、内外宗教の研究を通じて宗教相互の理解を深め、ひいては人類文化の向上に資する目的で、1954年5月設立されました。現在は日本の数十に及ぶ宗教団体や研究機関を賛助会員とし、また多くの個人会員に支えられ、的確な宗教情報の提供や宗教研究の推進、また宗教者・ジャーナリスト・宗教研究者の相互理解の深化を目指して、活動を進めています。併設する宗教情報リサーチセンターの運営、定期刊行物『現代宗教』『国際宗教研究所ニュース』、『ラク便り』の刊行、定期的なシンポジウムや研究会の開催、およびその成果の出版などを継続的に行っていることはご承知の通りです。

このたび(財)国際宗教研究所では、その活動の新たな展開として以下のような要項による「国際宗教研究所賞」を創設することになりました。

- (1)本賞は、今日的な問題意識に立つ宗教研究において優れた業績をあげたものに与えられる。
- (2)研究業績の選考は、(財)国際宗教研究所の活動趣旨を踏まえ、(1)現代性、(2)国際性、(3)実証性などにおいて優れた点を有するものとする。
- (3)応募者の年齢は原則として40歳未満とする。
- (4)刊行、発表年度は2003年4月以降2005年3月末までに発表された刊行物、および学位受理が終了した学位論文。
- (5)応募は、自薦・他薦を問わない。
- (6)選考人数は1名とする。
- (7)賞金は30万円とする。
- (8)審査委員会は国際宗教研究所の役員5名で構成し、委員長は理事長とする。
- (9)応募締め切りは2005年度に限り2005年9月末日(研究所必着)とする。なお2006年度以降、締め切りを数ヶ月早める予定である。
- (10)審査日時等は次のような予定である。審査期間2005年10月1日より11月30日、審査結果報告12月初旬。授与式は2006年1月。

募集要項の概略は以下の通りです。申請書は下記研究所賞係まで、住所・氏名を明記した定型返信用封筒(90円切手貼付)を同封して取り寄せてください。

- (1)当研究所所定の申請書に必要事項を記入し、業績とともに(財)国際宗教研究所まで、上記締め切りまでに送付すること。
- (2)審査対象業績は合計3部を研究所宛に送付すること。

以上、趣旨をご理解いただき、奮ってご応募いただきますよう、ご案内申し上げます。なお不明の点については、(財)国際宗教研究所・研究所賞係までお問い合わせください。

〒165-0035 東京都中野区白鷺2-4 8-1 3 電話(FAX 兼用) 03-5373-5855

財団法人 国際宗教研究所 (理事長・脇本平也 所長・星野英紀)

特集 宗教復興の潮流

イスラーム復興のはざまで

妊娠祈願儀礼にみられる上エジプトの民衆的宗教世界

岩崎真紀
いわさき まき

一、はじめに

二〇〇四年一〇月七日夜、「シナイ半島ターバのリゾートホテルで爆破テロ発生」というニュースをカイロで聞き、エジプトでも再びテロが起こったのかと暗澹たる思いでテレビ画面に見入った。エジプトでは一九九七年のルクソール事件以来大規模なテロ事件は起きていなかったが、ターバでのテロはエジプトでも「イスラーム主義」的イデオロギーを標榜する過激な破壊活動が行なわれる可能性がまだまだあるのだということを再認識させた。一方、暴力を伴うこうした急進的イスラーム主義とは別に、エジプトをはじめとするアラブ・イスラーム諸

国では民衆レベルのイスラーム的伝統への回帰現象、すなわち「イスラーム復興」もみられる。具体的には一九六〇年代後半以降イスラーム的服装やヴェールを着用する女性の増加、モスク建設の急増、イスラーム関係出版物の増加、個人の宗教的意識の高まりなどといった、より人びとの生活に根ざしたイスラーム復興の動きが顕著になり、こうした志向性は二一世紀となった現在でも基本的には変わりが無い。実際、筆者が第一回目の滞在をした一九九九年と現在を比べても、カイロの女性達の公的空間でのヴェール着用率は増加したと感じられる。こうしたことを鑑みると、イスラーム主義／復興とは、イスラーム的イデオロギーを用いてムスリムとしてのアイデ

ンティティーを強調することによって、自（イスラーム）と他（非イスラーム）の境界線を明確にする志向性が非常に強い運動／現象であるということが可能だろう。

エジプトにおけるイスラーム復興については近年、学界やジャーナリズムの場でますます多くの事例が報告されており、「宗教復興の潮流」という本号のテーマに合致するものもある。しかしながら、こうした現象の一方で、エジプト社会では、イスラーム以前の古い宗教伝統との連続性を有し、コプト／ムスリムという既存の「信仰」の境界線を越えた民衆の宗教的実践、換言するならば民俗信仰が現在でも根強く存在し続けていることはあまり知られていない。筆者は二〇〇四年に上エジプトの農村で行なったフィールドワークを通じてそうした民俗信仰の存在を知り、「イスラーム社会」として一枚岩的に語られがちなエジプト社会が、実際には宗教的重層性を持った社会であることを認識する必要性を強く感じた。

調査対象の村にはムスリム、コプトを問わず子宝に恵まれない夫婦（あるいは妻のみ）が妊娠祈願に訪れる古

う。このような問題意識のもと、本稿では前述の妊娠祈願儀礼に関して筆者が行なったフィールドワークで得られた諸事例を題材として、エジプトの民俗信仰について考察したい。

なお、イスラームが主要な宗教であるエジプト社会を対象とした場合、信仰という語には注意を払う必要がある。というのも、アラビア語で「信仰 imān」は神への信仰を意味し、それ以外の対象はありえないためである。また、祈願や参詣といった民俗信仰に頻繁に登場する語にも同様のことがいえる。したがって、本稿ではイスラームとコプト教の概念としてこれらの語を用いる場合は、「信仰」「祈願」「参詣」等と括弧付で表記し、民俗信仰の概念のそれとは区別して用いることとする。

二、調査地の概要

調査地のテヘネ・アル＝ジャバル⁽¹⁰⁾ (Tina al-Jabal, 通称テヘネ村)は上エジプトのミニヤ (al-Minya) 県に位置し、首都カイロの南方約二二五km、県庁所在地のミナヤ市からはナイル川をはさんで約一五km北東の距離にあ

代遺跡があり、彼らは毎週決まった時間にこの遺跡を訪

れ、儀礼的行為を行ない子宝に恵まれることを願う。この儀礼は、聖者崇拜などとは異なりイスラームともコプト教とも直接的には関わりがなく、参加者たちも自らの行為を「宗教的」行為ではなく「慣習 ḥād」や「伝統 taqlid」とみなしている。この意味においては、本儀礼はグリーンエバウムが述べるところの、イスラームの「大伝統／小伝統」概念の小伝統にすら入るものではない。しかし、その実相を宗教学的に検討してみると、妊娠祈願という目的、古代神殿跡で実践されること、儀礼と呼びうる行為であること、参加者の出自の多様性等、民俗信仰というひとつの信仰形態であるということが可能である。そしてそれは、イスラームおよびコプトという經典的・制度的「宗教」のみをエジプトにおける宗教であるにとらえていたのでは、見落としてしまう宗教現象であるといえよう。こうした観点から既存の宗教的枠組みや時代を超えた民俗信仰の実践に着目することは、厳格な一神教としての側面ばかりが強調されがちなエジプト社会の、動態的かつ全体的な把握への試金石となる

る（地図参照）。総人口は約七千人で、村人の大半は農業に従事しており、筆者の滞在時期（七～九月）はドウツラ (durra) と呼ばれるトウモロコシの収穫とジャガイモの植付けの時期に重なっていた。

エジプト社会にあつては総人口六八四万人の約一〇%をコプト・キリスト教徒⁽¹¹⁾（以下コプト）が占めているが、テヘネ村の宗教人口比はおよそムスリム七割、コプト三割とエジプト全土の平均よりもコプトの割合が高い⁽¹²⁾。エジプトにおけるコプトとムスリムの関係については、一九九〇年代にイスラーム主義反体制武装闘争派のイスラーム団 (al-Jamā'a al-Islāmiyya) によるコプトへの組

